成高先生に出会ってからである。先生は単なる歴史の研究者ではなく優れた歴史家であった。だから、先生から学んだことは実に多いが、なかでも「歴史とは何か」、「歴史はどう見なければならないか」ということを学んだように思う。

しかし大学院に入ってからも、本当にやりたいこと、やらなければならないことについて迷いに迷った。その頃に出会ったのがドイツの歴史家ゲルト・テレンバッハの『自由―叙任権闘争期における教会と世界秩序』という本である。私がその後二十年ばかりの間「叙任権闘争」とか「グレゴリウス改革」と呼ばれている出来事の研究に没頭したのはそのためである。この出来事は単なる叙任をめぐる争いでも教会の改革でもない。それは西欧中世社会に最大の転換をもたらした大事件であり、テレンバッハの言葉を借りれば、「世界における正しい秩序をめぐる闘争」であった。その後私の関心は十二世紀を中心とする文化史的問題に移って今日に至っているが、要するに、私がこの時代を研究してきたのは、この時代にヨーロッパが形成されたからであり、この時代を研究しなければヨーロッパの歴史は分からないと考えてきたからである。

そもそも、何故私は西洋の歴史を学んできたか。その理由を一言で言えば、それは西洋の歴史が我々の歴史でもあるからである。言うまでもなくわが国は、明治維新以来、ほとんどあらゆる面で西洋の文化を取り入れてきた。学問や大学の源もすべてヨーロッパにある。だから、我々の歴史は西洋の歴史を学ばなければ分からないのである。しかも、国際化、グローバル化が進みつつある二十一世紀に生きる我々にとって、西洋の歴史を学ぶ必要はますます大きくなっていると言えよう。

では、西洋の歴史のなかでも何を問題にしなければならないか。私の独断と偏見で言えば、それは政治や経済ではなく、歴史の創造的基盤と伝統を形作ってきたもの、つまり文化だと思う。私が文化史的な問題に関心を移してきたのもこのことに関連している。

最後に、歴史を学ぶ上で最も重要だと思われることを三つ指摘しておこう。一つは、自分の関心を明確にすることである。二つ目は、過去をも含めて世界全体を見ようとすることであり、三つ目は、歴史をみる場所と視点を定め、そこから過去の人々の生活や文化をイメージすることである。西洋史を含めて、歴史から何かを学ぶことができるとすれば、それは、現在の地点に立って、過去をいかにイメージすることができるかどうかにかかっている、と言えるのではなろうか。

〈第二回〉

日本近代史への開眼

由井正臣

一九三三年生まれのわたくしは、万事戦時色のなかで少年期を過ごした。四五年八月の敗戦は、旧制中学一年生として迎えた。

ようやく自分の頭で考えられるようになった中学生として、戦争から戦後の大混乱期を体験したことは、よかれあしかれわたくしの人生に深く刻印されることになる。

アメリカ占領軍の命令で歴史の授業は禁止され、中学時代歴史の授業は受けず、高校になってから復活された授業でもまともな教科書はなく、体系的な歴史教育を受けないまま終わった。しかし反面、なぜ日本は無謀な戦争を行ったのか、日本にはなぜ民主主義的社会が育たなかったのか等の疑問を、歴史の中に回答を求めようとする欲求は強かった。墨ぬり世代として、教科書に不信をもつわたくしは、それを日本史関係図書を濫読することで満たそうとした。そうしたなかで出会ったのが、石母田正・高橋磌一・遠山茂樹共著『世界の歴史Ⅳ　日本』であった。著者についてはまったく知らなかったが、この本はわたくしの受験参考書ともなった。著者たちが新進のマルクス主義歴史家であったことは後に知ったのだが、この本との出会いは今でも幸せだったと思っている。

大学に入ってから、どの時代を中心に学ぶかは、ずい分迷った。近代史で卒業論文を書こうと決めたのは、E・H・ノーマン『日本における近代国家の形成』と遠山茂樹『明治維新』の影響であったと思う。卒論は「自由民権運動における民権論と国権論」と題し、自由民権思想家大井憲太郎と大阪事件を中心に論じた。遠山あるいは丸山真男らの研究に示唆を受け、枠組みをつくり、大学図書館にこもって新聞史料や『明治文化全集』などを手書きで写しとった苦労は今でも思い出深い。

大学卒業後、わたくしは大学院進学を断念し、一年後に国会図書館に就職した。この間の不安定な精神状態を支えてくれたのは、深谷博治先生主宰で、中村尚美・山口一之・鹿野政直さんらすぐれた諸先輩の参加していた「近代日本史研究会」の末席に加えていただいたことであった。この研究会は、いまから思えば、戦後早稲田の草創期の日本近代史研究者を育む母胎であった。会誌「近代日本史研究」第六号に、わたくしは卒論を手直しして「大井憲太郎の思想」という拙論を発表させていただいた。

国会図書館で雑務に追われながら学問への期待をつないだのは、この仕事があったからであると思う。国会図書館では、近代政治史料の宝庫である憲政資料室（大久保利謙先生の努力による日本最初の近代史料アーカイヴ）への移転を希望しつづけた。それが叶ったのは入館後四・五年たってからである。以後、わたくしは政治家・官僚らの文書の収集と整理、閲覧者へのサーヴィスという仕事が日常となった。多少研究に接近したのである。

そうした中で、わたくしは、寺内正毅文書のなかに、山県有朋の「社会破壊主義論」と題する意見書を発見した。この意見書が一九一〇年の大逆事件取締りに関するものであったのは内容上判断はついた。しかし、私は二つの疑問をもった。一つは、はたして山県起草のものか、他に起草者がいるのではないかという点と、二つにはこ

の意見書のなかで「家国」という独特の言葉が数回使われていることである。この疑問を解くべく、わたくしは種々他の史料にあたりながら、大逆事件をめぐる宮中・政府の動向を調べていくうちに、この意見書が、東京帝大の憲法学者穂積八束の国家観と一致していることをつきとめた。これによって、わたくしは大逆事件を契機とする社会主義・無政府主義弾圧とその対策の権力者の動向の新たな側面を明らかにすることができた。

「家国」という言葉から発した小さな疑問を解明するなかで、大逆事件の歴史的連鎖の一側面を解明するという実証作業は、歴史という学問の面白さと、研究者としての小さな一歩を踏みだす自信を与えてくれたように思う。

私が考古学を始めたころ

岡内三眞

私が考古学を始めたのは、早稲田大学に入学して以後のことですから、考古ボーイではありません。四万十川のほとりにある窪川高校の小さな図書室で、Sven Hedin（スヴェン・ヘディン）の中央アジア踏査記や河口慧海のチベット潜入記など探検物を読んで、遠く離れた中国西部に憧れて、早稲田の東洋史に入学したのです。一九六四年四月からさっそく『史記』や『漢書』を調べる専門授業が始まったのですが、学生の［考古学研究会］に入会してから風向きがかわりました。教室内で漢文を読むよりもフィールドでの考古学調査が楽しくて、ほとんど［考研］に入りびたるようになってしまいました。それが考古学に進むようになったきっかけのひとつです。そのころはまだ早稲田大学に考古学の専修がなく、数人の先生方が文学部（櫻井清彦、玉口時雄、川村喜一）、教育学部（滝口　宏、西村正衛、大川　清、金子浩昌）、理工学部（直良信夫）で、それぞれ考古学関係の講義をされていました。その授業を正式にあるいはモグリで聞いて勉強した自由な時代でした。考古学畑での同級生は、杉山晋作さん（国立歴史民俗博物館教授）や十菱駿武さん（山梨学院大学教授）などです。そのころは東京オリンピックから大阪の万国博覧会にむかう経済成長の波にのり、建設ラッシュが続いていました。われわれ学生は工事に伴う事前調査や緊急調査に明け暮れ、二、三年生のときは年間一五〇日以上も学外調査に参加したものです。長期休暇には、技術を磨き知識を深めるため武者修行のつもりで遠隔地の発掘調査をめざし、先生や先輩に紹介されて福岡県から福島県まで日本各地に出かけました。先輩の平野吾郎さん（静岡県教育委員会のちに磐田高校校長）に連れられていった登呂遺跡の合同発掘調査もそのひとつです。現代の水田の下に重なっている弥生時代の古い水田址を調査し、畦道や水路が出てきたのには感激しました。この合同調査には早稲田、明治、國學院の学生が参加し、それぞれの学生気質や調査技術にも違いがあり、目を開かれる想いがしました。今でもみな